

2つの“3・11”の災禍から、 11年目、3年目となる春（2022.3）に In the spring (March 2022), think of two “3.11” disasters and Ukraine crisis

末永 カツ子

Katsuko SUENAGA

仙台青葉学院短期大学

Sendai Seiyō Gakuin College

第8回学術集会（2019.9.28-29）を福島にて開催させて頂いてから3年目となる今春、予測もしなかった危機的状況がウクライナで勃発した（2022.2.24）。1か月経過して、戦況は日を追うごとに激しくなり看過できない緊迫した状況が続いている。

“3・11”とは

本稿での“3・11”とは、東日本大地震・津波 & 原発事故（2011.3.11）と、新型コロナウイルス感染症のパンデミック宣言（2020.3.11）である。マスコミは、11年前の“3・11”以来、毎年この日に照準を当て、被災地の復興状況に関わる特集を報道してきた。私たちにとって“3・11”は、大震災の体験を想起したり、その後の人々への影響や変化などを共有するための契機となる共通の言語となってきた。これに、3年前からはコロナ禍も加わった。しかし、この3月のマスコミの報道は、“3・11”のニュースは激減し、ロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻開始以降、戦況の報道がメインとなっている。

“ウクライナ”で起こっていること

ウクライナには、4か所の原子力発電所（15基の原子炉が運転可）であるという¹⁾。ロシア軍は、チョルノービリ原発（2.24）やザポロジエ原発（3.4）などを占拠した²⁾。IAEA（国際原子力機関）は、チョルノービリ原発の技術者が住むスラブチッチがロシア軍に掌握され、技術者の交代の見通しが立たなくなり原発の保守管理に支障が出るおそれがあると懸念を示した（3.27）³⁾。また、主要7カ国（G7）の首脳は、ロシアが生物兵器や化学兵器、もしくは核兵器を使用しないよう警告した（3.24）⁴⁾。

一般市民の犠牲も増大しているなかで、国連難民高等弁務官フィリッポ・グランディ氏は、自宅を離れて国外や国内への避難を強いられた人が1,000万人に上っていると明らかにした（3.20）⁵⁾。ユニセフは、子どもの推定人口750万人の半分以上にあたる430万人の子どもが避難を余儀なくされていると発表した（3.24）⁶⁾。こうした避難者には夫や父親がいない。国民総動員令により18～60歳の男性は国外に出られず難民の9割は女性と子どもであるからだ。攻撃の激化に伴い空爆を避けるためにキーウの地下鉄は防空壕化するなど、街の様

相は一変した。攻撃された建物の前に子どもの姿がないベビーカーが並べられた映像には心が痛む。

第8回学術集会在契機となった“つながり”

以下には、第8回学術集会在契機となったつながりを2つ紹介する。交流集会「福島で語ろう」では、カンボジアを調査のため訪れた際に通訳と現地案内をしてくれた3人の青年たち（以下、彼ら）をプノンペンから招聘した。“3・11”の津波・原発被災者との国際交流が目的であった。彼らの両親や祖父母たちは、ポルポト政権下の内戦とジェノサイドなどによる国土の荒廃を経験しており、“3・11”後の復興過程にある日本に高い関心を持っていた。

彼らは、福島県の前原被災地と宮城県の前津波被災地を視察するスタディツアーに参加し、被災者たちと交流集会在合流した。学会参加者（被災者を含む）とのディスカッションの場では“見て感じた被災地の今”を語った。交流集会上には彼らを南相馬市小高地区で迎えた高齢者たちも参加していた。彼らは、スタディツアーで高齢者たちの住む地区や自宅を訪ね“3・11”後の原発事故後の避難体験を聴き自分の親や祖父母の体験を重ね合わせた。夜の懇親会では地元の盆踊りを一緒に踊った。交流集会在終了し別れる際には抱擁し合い再会を約束した。その後、コロナ禍のなかでもZoomで互いの近況を伝え合っている。

市民公開講座では、日本で公演活動を行っているウクライナ出身のヴァンドゥーラ奏者ナターシャ・グジーさん（以下、彼女）の美しい演奏と歌声を聴いた。彼女の市民公開講座への参加は、“3・11”後の福島での学会開催の意義を理解し協力してくれた地元の市民ボランティアの働きかけによって実現した。彼女は、ライフワークとしてチョルノービリ原発の被災体験を伝える活動を行っているほか、“3・11”以降は、被災地への支援活動にも精力的に取り組んでいる。

彼女は、チョルノービリ原発事故（1986.4.26）直後、6歳のときに住んでいたプリピャチで被曝し家族とともにキーウに移住した。一人で暮らしていた彼女の母親は、3月6日に戦禍を逃れてキーウを離れ、鉄道やバス、時には徒歩で移動し3月8日に隣国ポーランドの避難所へたどり着く。その後、3月21日に羽田空港に着いた母親は、彼女の妹カテリーナ・グジーさんと劇的な対面を果たしている⁷⁾。

突然襲ってくる災害、感染症、戦争という災禍は、恐怖や脅威をもたらし理不尽にも人々の命や、日常生活やつながりも断ち切っていく。こうした“危機的状況”の発生が日常化するなかで、“いま、ここで”どんな価値を大切にしていれば行動を選択していくかを問われる時代となっていることを、今春は、特に、強く感じられた。

私の大学では、卒業授与式（3.18）の2日前に、“3・11”を甦がえさせる福島県沖を震源とする宮城県、福島県で最大震度6強を観測する地震（2022.3.16）があった。卒業生の多くが災害の多い東北の出身者であり、“3・11”の影響を受け看護の道を志した若者たちである。コロナ禍で不自由な学生生活を強いられたにもかかわらず巣立っていく彼らの表情は晴れやかであった。これからも看護を志す若者たちとともに、国内外で起こってくる出来事に関心を持ち続け、平和な日常があることやつながり合うことの大切さを伝え未来への希望を託していきたいと思う。

ウクライナで一刻も早く停戦となることを願って
仙台にて（2022.3.31）

引用文献

- 1) ウクライナ ザポリージャ原発 “ロシア軍が掌握”【なぜ?】. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220304/k10013513381000.html>（検索日：2022年3月31日）。

- 2) ロシア軍, チェルノブイリ原発を占拠 ウクライナは「生態系災害」の再来を警告 BBC NEWS. <https://www.bbc.com/japanese/60657207> (検索日: 2022年3月31日).
- 3) ロシア軍チェルノブイリ原発近い町掌握 技術者交代できず IAEA. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220327/k10013553981000.html> (検索日: 2022年3月31日).
- 4) G7, ロシアの生物・化学・核兵器使用の脅威を警告 = 首脳会議声明. <https://jp.reuters.com/article/ukraine-crisis-g7-idJPKCN2LL1XM> (検索日: 2022年3月31日).
- 5) ウクライナ国内外の避難民, 1000万人に 国連難民高等弁務官. <https://headtopics.com/jp/124541246312521835674-24947999> (検索日: 2022年3月31日).
- 6) ウクライナ危機: 紛争激化から1カ月が経過~子どもの難民は430万人に 公益財団法人日本ユニセフ協会. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001930.000005176.html> (検索日: 2022年3月31日).
- 7) ウクライナから娘が暮らす日本へ避難の母親 羽田空港で再会. <https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20220322/1000078148.html> (検索日: 2022年3月31日).